

コラム

電子ブック：
試読型選書システム (DDA) を利用してさこ かつら
迫 桂

(経済学部准教授)

電子ブック試読型選書システムが慶應で導入されて以降、活発に利用している。研究者と教員の視点からすると、このシステムの最大の利点は、英語図書の検索プラットフォームとして利用できること、必要な資料が、即時、または、短期間で利用できることの2点である。

私の専門はイギリス文学であるが、最近、人文科学系老年学という領域で研究を行っている。これは比較的新しく、とても学際的な領域である。研究に必要な図書資料は、ほぼすべてが英語で、複数の分野にまたがる。さらに、急速に発展中の領域であるため、重要な新規刊行物を常に把握するのは難しい。この点から、慶應に所蔵がないものも含め、多くの最新資料が検索対象になっているEbook Centralは便利である。慶應で未購入の図書でも、多くの場合は、オンラインで即時購入申請ができ、数日後に

はその資料の利用が可能になる。研究・出版活動においてスピードが求められるなか、この恩恵を実感している。また、電子ブックは、契約上許容される範囲で、必要な章や部分をダウンロード・印刷することが可能である。この機能が特に有効なのが、最近増加傾向にある、大きなテーマのもと、複数著者が独立性の高い章を寄稿する図書である。また、アクセスの利便性は、研究出張中にも大変有難い。

慶應全体で授業の英語化が進み、経済学部も同様である。私の担当授業も、使用言語は英語である。英語図書は高額で、購入申請から納品まで時間がかかるため、授業で使用する事が難しかったが、電子ブックのおかげでそれが可能になった。参考図書として複数を指定することもしやすい。自宅からも気軽にアクセスできるため、学生が授業で指定された資料を利用して学習する度合いも増したと感じる。